

## 教養教育に関するフォーラム—— 大学教育の質の改善のために パート1

学 長 小川 秋 實・副学長 橋 本 功

「教養教育に関するフォーラム第5回」は、平成10年5月14日・15日の両日、乗鞍高原あずみ荘において開催した。今回のテーマは「大学教育の質の改善のために」で、講師は京都大学高等教育教授システム開発センター長梶田叡一教授にお願いした。講師の講演の後、大学教育の質を改善する方法等について参加した22名の教官と講師の間で活発な質疑応答があり、白熱した討論が展開された。以下はその概要の報告である。

### 講師の紹介

1964年に京都大学文学部（哲学科心理学専攻）を卒業。1971年に『自己意識の社会心理学的研究』で京都大学より文学博士の学位を受く。1966年に国立教育研究所研究員となり、同主任研究官、日本女子大学助教授、大阪大学人間科学部教授（教育心理学講座）を経て、1994年10月より現職の京都大学高等教育教授システム開発センター教授。

### 1日目 第一部 14時30分～17時

#### 梶田叡一教授の講演要旨

#### 教育の質を量る方法

教育の質を知る上で授業評価は重要な役割を果たす。京大では授業評価を含め教育活動の改善について議論するために、3年前から1泊2日で全学セミナーを実施している。ただし、総長がセミナー開催を決め自由参加にしたところ、参加希望者が少なかったため、参加者を学部割り当て制にし、強制参加にしている（全学で200人余り）。

授業評価は少なくともつぎの三つの観点から行う必要がある。

- ① 入学から卒業までの長い目で見た教育活動の全体的評価
- ② 「今の目」で見た個別の講義・演習等の評価
- ③ 卒業後の目で見た評価

京大の卒業生にアンケートを実施した結果（回収率40%）では、「教育に満足しているか」の質問に対し、工学部1954年度卒業生は80%以上が満足、1994年度卒業生は20%が満足。医学部でも同傾向であった。文学部では卒業年次による差は大きくなかった。在学中の4年次生全員に対する調査では、「知的刺激を受けた講義があったか」の質問に対して、工学部と医学部の学生は最低であった。昨年の比叡山セミナーで工学部長と医学部長は、「両学部とも職人教育をしているので、講義のあり方に満足してもらうのは難しい」という。京大の共

通教育では「男性開放論」が最も人気があり、1,600人近く受講している。工学部や医学部では、こういうことはできない。学部の性格から、満足度だけで済まされないものがある。しかし、これを開き直りの論理に使ってはならない。

大学の質は、教員の研究業績にもまして、教育という観点から量ることが重要だ。教育の結果として学生が卒業後どのようなようになっていったかというのも、教育の質を量る重要な物差しになる。卒業生がどのような活躍をしているかを、一部上場会社の管理者数からみると、今では東大が辛うじて1位、昨年社長になった人だけで見ると、慶応大が1位、東大が2位。偉くなろうと思ったら京大は駄目。京大には何百人に一人優れた者が出ればよいという考えがある。ノーベル賞受賞者は多いが、卒業生の全体的な質という点からは問題がないわけではない。大学の質が、以前は論文や有名教授数、教員と学生の比率などで見られたが、現在は卒業生の活躍から教育の質を見る。これはよいことだ。

教育の質を向上させるには、このようなフォーラムを定期的で開催することが重要だ。

### 教育の質を高める努力をしない大学は消滅する

現在、少子化と高学歴化の二つの波が同時に押し寄せている。今はその過渡期だ。この波を乗り切れない大学は生き残れない。2010年頃には、大学進学率が70～80%に達することが見込まれている。現在の大学の数から判断して、募集定員を満たせない大学が出現する。2年間入学定員割れが続くならば、文部省から入学定員削減の勧告が来るだろう。この事態に直面すると、研究を重視し、教育をおろそかにする大学は持ちこたえられない。教育の重視こそが、大学が生き残れる唯一の道だ。

高知大学は危機意識を持ち、「大学論」を通年開講し、全学生の必修にしている。この授業では、「大学とは何か」、「大学の4年間で何を身につけるのか」などを1年かけて学生に語りかけ、「高知大学ではないと得られないもの」を教えるための試みを行っている。信州大学には日本各地からバランスよく学生が集まっていると聞いている。信州大学が信頼されていることの証であろうが、この状況をいかに維持してゆくかが、今後の大きな課題であろう。繰り返すが、教育の質を高めるための努力を怠っている国立大学は、いつ潰れてもおかしくないというのが昨今の社会情勢だ。

国立大学に対して金がかかり過ぎるという声がある。政府は、英国のサッチャー政権が行った独立行政法人化をやるようとしている。私は英国の多くの大学を視察したが、自主性を高めたのはよいにしても、それを生かすのは大変なことだ。日本の不景気が今後も続けば、2010年に国立大学は現状のまま残っていると思わないほうがよい。私立大学はかなり潰れるところが出るであろう。これからは、教育の質で勝負するしかない。

国立大学は私立大学に比べて自主的な改革に欠けるところがある。自主性を高めるために、私立大学への助成金方式を国立大学においても実施するのはどうだろうか。必要経費が黙っていても国から与えられるのではなく、成果に比例して助成金が割り当てられるという状況に置かれると、否が応でも個々の大学が自主的に教育の質を高めるための努力をせざるを得なくなる。この10年以内にそれぞれの大学が生き残りを賭けた努力を行い、卒業生からは「この大学を出てよかった」、企業からは「この大学の卒業生を採用してよかった」という声が聞かれるようにしておく必要がある。

大学を以下のように分類する方法がある：

- ① 古典的な大学：哲学、神学、宗教学を中心とする学問を教えるためにつくられた大学。例えば比叡山大学、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学等。
- ② 旧制大学＝帝国大学：国家枢要の役に立つ大学。国家的意味のリーダーを養成するためにつくられた大学。東大等。
- ③ 新制大学：社会のリーダーを養成するためにつくられた大学。高度な教育ではあるが、普通の社会人を養成する大学。
- ④ 新新制大学：それ以降につくられた大学。

少子化によって進学率が80%に達する時代には、このような古いタイプの分類は役に立たない。発想を転換して今日の大学の使命を考えるべきだ。共通教育は変えなければならない。工学部では、専門基礎をきっちり積み上げ、技術発展史、技術倫理が必要。教育学部では、教育史、教育倫理、医学部では、倫理、哲学、日本精神史が必要。カリキュラムの組み方、意識の持ち方から考えなければならない。

#### 〔質疑討論〕

参加者：自分がきっちりやっておれば学生がついてくると思っていたが、学生には評価されない。自分の取り組みが評価されるためにはどうすればよいのか。

梶 田：学生がついてくるとするのは幻想だ。学生は変わってきている。学生を知らなくして、学生はついてこない。教育をきっちりやっておれば、研究もやりやすくなる。大学の教師は、研究、教育、社会の三つを連携させることが大事。自己点検評価にはこの3点が必要だ。Stanford 大学をはじめアメリカの有名大学では採用に当たって研究業績の他に教育業績を出させている。

参加者：日本では学科増設時に研究業績のみが要求される。

梶 田：もちろん教育業績だけでは無理。研究業績あつての教育だ。研究業績は専門家としての最小限必要な条件である。

参加者：日本で教育業績を評価に加えている大学はあるか。

梶 田：ほとんどない。美術や音楽では、実績を見ているが。

参加者：昇任では、教育評価はうまく機能していない。

梶 田：京大の総合人間学部の昇任のときは教育業績も考慮したと聞いている。

参加者：東大や京大にはできる学生が入学している。そうでない大学は同じ観点で質を論じられない。

梶 田：偏差値が高くて入学してきた学生が、本当に学問をするに適する学生かどうかは疑わしい。偏差値が高い学生が来ているから問題がないというのは間違いだ。東大入学生のワースト・テンはすべて私立高校出身者だ。人間教育している高校からは入ってこない。京大医学部では「18歳からは採らないことにしたい」という声もある。某有名私立高校からは一人も欲しくないという。IQ は決まっているという考えは誤り。4年間でどうするかだ。西田幾太郎はエリートではなかった。自分を燃やすものを見つけたからだ。学生のブランド信仰を打ち破るべきだ。

参加者：私の学科では、現役進学率の高い高校から来た学生には気を付けることにしている。

センター試験ができなかった学生が入学後がんばる傾向が強い。入学後4年を経て比較すると、上位の学生は、皆、推薦入学で入った学生だ。推薦入学の学生はよい。結果として、運動部出身が多い。人物を見た方がよい学生が選べるというのが私の学科における認識だ。

梶 田：仰る通り。点数だけではだめ。人物が大事だ。多様な学生を入れる必要がある。日本では機械的な判定を公平と考えるところがある。人物は点数化してはダメ。人物は独立して考える必要がある。アメリカの多くの大学では、SAT (Scholastic Aptitude Test=大学進学適性試験)、内申書、2次試験、面接がある。アドミッションズ・オフィスでは、それぞれの判定官が独立して判定結果を出し、それをアドミッションズ・オフィサーが読み上げ、判定官の挙手によって合格判定をしている。面接官が10人中8人がOKなら入れる。10人中OKが3人以下なら入れない。後は上から順に取る。つまり総合判断している。決して点数化しない。

参加者：工学部は、いわば、職人教育を行うところ。人間教育はどこまでやればよいか。

梶 田：必修は、歴史、倫理、精神史で、後は選択でよい。情報処理はやらざるをえないが。

参加者：大学には偏差値が上位の者を入れる方がよいのでは。

梶 田：東大や京大でも補習教育を行っている。偏差値だけではダメ。科学技術は日進月歩。教えることが毎年増えている。授業科目を厳選して、しぼる必要がある。

参加者：higher education と post-secondary education の区別はどこに置くべきか。

梶 田：post-secondary education は高校の延長、higher education は高校までとは繋がっていない。切れている。今は、研究と教育を分ける必要がある。研究は最先端のことを、しかもポイントのような課題をやり、教育は初歩から、しかも全般的な体系に沿ってやるのが今の大学だ。いい研究者といい教育者は異なった役割であるが、必ずしも二律背反でなく、一緒にならなければならないものだ。

参加者：「よい教育者」と言うとは何となく分かるようで分からない。梶田先生の仰る「良い教師」とは何かを教えていただきたい。

梶 田：考える教育ができる人、理想像を作り、そこに向かって教育できる人だ。一方では、反面教師も必要な場合がある。いつも同じスタイルの教師でいる必要はない。

参加者：教官の質を高めるには自助努力が必要だ。教官の側に無断休講や内容が練れていないなど問題がある場合もある。中身を改善するためにはどうしたらよいか。

梶 田：シラバスの作成と学生による授業評価が必要だ。後者は必要悪だ。シラバスを作ると、授業について考えざるを得なくなる。また、このような教養教育フォーラム、ファカルティ・デベロップメント (FD) には義務的に参加するようにする必要がある。

参加者：特色ある大学造りというが、金太郎飴だ。特色ある大学造りを行った大学を教えてください。

梶 田：慶応大学の湘南キャンパス、桜美林大学、上智大学などがその例だ。慶応大湘南藤沢キャンパスには、はっきりとした理念がある。全教員の授業評価をしている。ただし、創設時のメンバーが減り、マンネリ化していると言われている。桜美林大学は、FD、授業評価に熱心だ。一つの理念が通っている。学生と教師の話合いの場

がある。

参加者：梶田先生は、研究、教育、社会性を統合したものを持っておられる。いつごろ一体化されたのか。

梶 田：この十年間で一体化した。それまでの私はばらばらだった。今は、現象的にはバラバラにみえても、自分の中では繋がっている。

参加者：共通一次試験と新新制大学との関係は。

梶 田：志願者が増えたのでマークシート方式でやらざるをえなくなったのであろう。私は、国会の文教委員会で反対意見を述べたことがある。マークシート方式でカバーできるのは、記憶と理解のある部分のみで、低次元のレベルを学力として評価している。これが高校教育にひずみを与えている。点数が客観的という考えを変えなければならない。

## 1 日目 第二部 20時30分～22時

「学生が変わった」をテーマに、梶田教授が京都大学におけるアンケート調査の結果（京都大学『学生相談研究』Vol. 18, No. 2, 1997）を紹介。

### 学生は変わった

梶 田：「京都大学での4年間でどう思うか」という問いに対して次の結果が出た。

- |               |       |
|---------------|-------|
| ① よかった        | 41.2% |
| ② まあよかった      | 41.7% |
| ③ よくもわるくもなかった | 9.0%  |
| ④ あまりよくなかった   | 6.6%  |
| ⑤ よくなかった      | 1.4%  |

大半の学生にとっては、4年間の学生生活は「よかった」と感じている。

「よく勉強したか」の問いにはつぎの結果が出た。

- |                         |       |
|-------------------------|-------|
| ① 授業にも出席せず、じぶんでも勉強しなかった | 33.4% |
| ② 授業には出席しなかったが、自分では勉強した | 28.9% |
| ③ 授業には出席したが、自分では勉強しなかった | 25.9% |
| ④ 授業によく出席し、自分でもよく勉強した   | 11.8% |

「授業に出席した」という回答を二つの選択肢③と④の合計で見ると37.7%。これを学部別にみると、文学部が50%、薬学部が49%、理学部が47%、農学部が46%であるのに対し、経済学部では17%でしかない。学生が一般的にまじめになってきたが、学生の気質は学部によって異なるので、大学単位で学生の気質をまとめることはできない。

「あなたが毎号必ず読む（立ち読みも含む）雑誌を教えてください（最大3誌まで）」に対するアンケート結果は以下だ。

雑誌のベスト・スリー得票数（人）

雑誌名	1位	2位	3位	合計
『ジャンプ』	107	26	17	150
『スピリッツ』	78	39	25	140
『マガジン』	40	57	28	125

この表が示す通り、京大生が読む雑誌の1位から3位まではコミックス系3誌が独占している。学生の間で『世界』や『中央公論』等の総合雑誌が回し読みされたのは、はるか昔のことだ。このような総合雑誌を1位にあげたのは、回答者の1%にすぎない。ただし、『AERA』や『VIEWS』などの総合雑誌を1位にあげた者は、5.1%を占めている。専門書を小脇に抱えることは、「いか京」（＝いかも京大生）といわれて最大の侮蔑だという。お勧めのテレビゲームソフトを知らないと話が合わない。

20代前半の学生と「当たり前」が違う。感覚をストレートに出しても噛み合わない。学生の感性が変わってきている。京大生は、親の収入も高く、お坊ちゃんお嬢ちゃんが多い。卒論・修論はびちっとしているが、文句を言うと、言い訳する。今や、異邦人だ。われわれの若い時と同型がいると思うと誤り。相手の内面世界を知るには、昔流は通じない。

私は、学生に授業のコメントを書いてもらっている。女子学生にはかわいい子が増えたが、一度コメントをみると夢が覚める。阪大で講義すると、前列には体育系の学生が並ぶ。冗談を言っても笑わない。しかし、コメントをみると見方が変わる。見かけに騙されてはいけない。コメントには当初嫌なことも書いてあるが、だんだん書くことが変わってくる。迎合だけでは駄目で、学生をこっちに引き込むことだ。

昔の京大生の服装は汚かった。それが京大生のトレード・マークであった。今は、ほとんどが綺麗な服を着ている。今の学生は、顔の表面だけを見ていると皆同じに見えるが、顔の後ろ側の世界を持っている。学生を知るにはそれを知らなければならない。

学生のなかには、親からワンルーム・マンションを与えられた学生、朝起きられずに中退した学生、パチンコにはまって中退した学生がいる。学生相談もびっくりする程幼稚な内容が多い。小・中・高で克服されるはずのものが残っているようだ。教員は、内容や尊敬されるという点では何とかなっているが、学生を知るという点では弱い。

#### 〔質疑討論〕

参加者：今の話はいつの時代にも繰り返されていることか。それとも今の学生は特別なのか。

梶 田：両面ある。読書量が根本的に違う。読書量が減ってしまった。

参加者：授業を展開する際、学生をサポートするのも教官の仕事か。

梶 田：学生が変わってしまったのなら、それに応じて授業方法も変える必要がある。自主性を引き出すことが必要だ。ただし、自主性だけではダメ。厳しく指導することも必要。自主性の尊重には場の設定が大事だ。教師が問題解決の方向やヒントを示さなければうまくいかない。「ほったらかせば、学生が自分で見つける」というのは誤り。マスコミはこの誤りを増幅している。大学院生の場合だが、私は最初の授

業で図書館に連れてゆき、『ABSTRACT』の使い方から教える。

参加者：これは教育学者の根本理念だと思うが、現実には違うのか。

梶 田：違う。きちっと整理して教えるのが教育者だ。指導すべき部分と裏にいて見守るべき部分がある。自主性だけでは困る。とんでもないことには厳しく指導しなければならない。

参加者：梶田先生は当たり前のことを仰っている。当たり前のことを教師がやっていないということか。

梶 田：月給泥棒の教師もいるようだ。やっていない方が多い。

参加者：教育の質を高めるために、教師が学生のところまで降りてゆかねばならないのか。学生に教師の生き様を見せ、それを学生に体得させてゆくという方法があるのでは。学生のところまで降りて行くのは、教育の墮落ではないか。授業を通して精神論を伝えることも必要では。

梶 田：生身の人間は自分を通して、自分なりに考えなければならない。自主性と自立性はほったらかしでは身に付かない。教える側の手のひらの上で学習させることが必要だ。教育は新しいことは何もない。古代ギリシャから言われている。今の教師が昔から言われていることをやっているのだろうか。常識を再確認することだ。教育には二面性がある。19世紀まではスパルタ教育であった。20世紀では子供の発達を考え、学ぶ側が中心になった。しかし、ちゃんとしたことが身につかなくなった。どう調和するかが問題だ。教育者は目配りのいい配慮をしてない。現場へ行って、絡みを見てアドバイスすべきだ。一面的できれいごとが多く、複眼的思考がない。原理原則を言う人が必要だ。スパルタ教育も学習者の自主性も、両方共に必要な場合がある。収束思考も拡散思考も必要だ。日本の教育は「一面的」であり、「きれいごと」で処理する傾向がある。

参加者：ちょっとお聞きしていると、「なるほど」と納得してしまいそうになる。教育上の難しい問題はそんなに簡単にはまとめられない。世界の教育者は、どの教え方が良いのか、どの教え方が悪いのか未だ答えを出していない。ある現象が目立つと、その方向に向いてしまうのはどうか。バランスが大切なことは誰でも知っている。子供に分からせるということが分からない。どうやって教育するか分からなくなる。

梶 田：長野県のあるところで子供の自主性中心の教育をして失敗した。両方が大事なことを分からないといけない。分かるということについては、今までに多くの業績がある。それを学生に分からせることが大切だ。

参加者：いろんなことをやって分からなかったことを分かせている。

梶 田：学級崩壊しているのは、何もしなかったからだ。子供の自主性だけを重んじ、強制はしないという人がいる。その結果、子供は何もしなかったという事例が現実起こっている。大学教育においても「覚えること」と「解決策を知ること」の両方が必要だ。「私の自主性を見てくれ」だけでは教育はできまい。

参加者：応用力は何で鍛えるのか。

梶 田：今までに出会ったことのない問題をやらせるのがよい。

参加者：教育実習は応用力が付くのではないか。

梶 田：そうかもしれない。

参加者：講義でも、記憶・理解以外の力が付くのでは。

梶 田：コメントさせ、それをフィードバックさせるとよい。

参加者：確かに学生は変わった。物質的に豊かになった。精神的には複雑になった。教育する者として、時代に迎合すべきか、それとも、改善を試みるべきか。

梶 田：このような状況のなかで、予見として何ができるかを考えるべきだ。今の社会状況の中で例をあげると、朝起きられない学生は変えられる。今の豊かな生活は変えることはできない。親が学生の面倒を見過ぎるというのも変えられない。

参加者：不登校の学生が多い。最近の特徴か。

梶 田：基本的には一時的なものと思う。自立面が薄れてきている。京大では、「無気力」、「起きられない」、「パチンコはまり」などで不登校が多い。親に連絡して立ち直ることもある。フォローには全学的体制が必要だ。

## 2日目 9時～11時

二日目は、教育の質を量る上で必要な「学生による授業評価」を取り上げた。「学生による授業評価の意義と課題」(『京都大学高等教育研究』II, 1996)をベースにした梶田教授の講演に続き、守教官(教育学部)から信大教育学部学生による授業評価について報告があった。最後にRuzicka 外国人教師(共通教育センター)から英語教育に関する話題提供があった。

### 学生による授業評価

梶 田：授業の質を高める上で、シラバスの作成が重要だ。文部省がシラバスの作成に力を入れているが、国立大学ではシステムティックにやっているところが少ない。私立大学では生き残りを賭けてシラバスの作成をやっている。慶応大では、年1-2回の講義の後に事務側が学生にアンケートをして、採点業者へ回している。武庫川女子大などでは、結果を学長・理事長へ報告。桜美林大もよくやっている。日本は、アメリカの30年から40年遅れでシラバスと授業評価を取り入れようとしている。ハーバード大学デレクボク・センターでは、教師の依頼に応じて、同センターが学生による授業評価を行い、その結果は依頼した先生にだけ報告することになっている。他の教官にも大学管理機関にも知らせない。アメリカの有名大学では、学生による授業評価を拒否する教員が多いと聞いている。日本では大学当局がやるか個人がやるかのどちらかのようだ。

学生評価にはつぎの三つの意義がある：

- ① [講義や演習等の評価が学生自身に対して持つ意義]
  - ・ 講義等における自己の体験を反省的に検討することによって自覚が深化する。
- ② [学生評価が教官に対して持つ意義]
  - ・ 学生の全般的な理解・関心・満足度等の把握から指導計画の修正ができる。
  - ・ 個別学生の反応把握から補充学習または発達学習の計画が立案できる。



- ・ 自己の指導の弱さと強さを認識し自己研修の方向を確認できる。

③ 「学生評価のまとめのフィードバックが学生に対して持つ意義」

- ・ 他の人達の評価結果を知ることによる自己の授業参加の姿勢・態度の反省ができる。

これからは、学生からのフィードバックが大切だ。指導計画の修正ができるし、個別学生の反応から補充・発展の計画ができる。自己研修の方向を確認できる。講義には体調が関係するが、フィードバックでこれも分かる。得意でないところは型どりの反応だが、得意なところは反応がよく出る。学生は、コメントに対するコメントにより、他の学生との比較ができるので、学生によって受け止め方が違うことを知る。これに気付いてくれることが大切だ。

フィードバックの具体的やり方にはつぎの3つがある：

① 評価表を用いる。

- 例 1. 面白くて退屈しなかった [はい・分からない・いいえ]  
 2. 違和感がありついてゆけなかった [はい・分からない・いいえ]

② 形容詞による評価 (Semantic difference) を利用する。

例		[非常に	やや		やや	非常に]	
1. 明るい	⑤	④	③	②	①	暗い	
2. 冷たい	⑤	④	③	②	①	暖かい	
3. わかりやすい	⑤	④	③	②	①	難しい	
4. 魅力的な	⑤	④	③	②	①	退屈な	
5. とりとめのない	⑤	④	③	②	①	ポイントの明確な	
6. 明るい	⑤	④	③	②	①	刺激のない	

③ 自由記述

例 この講義 (演習・実習) に出席したあなたの率直な印象について、以下に自由に書いてみてください。

日本では学生による授業評価は、私立大学と国立大学の間で二極化している。私立大学では経営努力の結果として、学生による評価を真剣に実施しようとしているが、国立大学では教師の間に危機感はなく、自発的にやろうとはしない。国立大は、10年しても学部・全学レベルでは普及しないのではないか。危機感があるか、あるいは音頭取りがいるかしないと難しい。一方で、教師の方は学生を知っているようで、実際は知らない。例えば、京大の教師のほとんどは、自分の学生が「毎号必ず読む雑誌」の1位から3位は『ジャンプ』、『スピリッツ』、『マガジン』であることを知らない。

続いて、守教官から、共同研究報告書『平成7年度大学改革推進等経費実施報告書：学生の授業評価による望ましい大学授業の特質の解明』(信州大学教育学部1996)、「教育学部生による学部授業評価」(『信州大学教育学部紀要』XC, 1997, pp. 61-70)及び「教育学部卒業生小中学校教員による学部授業の評価 (第1報)」(『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』V, 1997, pp. 1-10)を資料にして以下の報告があった。

守：学生による授業評価に対して「ノー」という人は決まって、「学生は、良い授業とは

何かがわかってないのだ」と主張する。ところが、私たちの研究では、学生が「何がよい授業かを決める」最も重要な要因は「説明のわかりやすさ」や「知的刺激を与えられる説明」だということが明らかにされた。学生は、ちゃんと授業の良し悪しをまともに判断しているのである。私たちはさらに、学生だけでなく、教育学部を卒業して小中学校の教員をしている「我が学部の卒業生」にもアンケートで授業評価をしてもらった。そうしたら、社会人になっているこうした卒業生の評価と、現役の学生の評価とは結局同じものだった。つまり、学生による授業評価の目は、分別ある大人の目と同様に確かなものと考えてもいいということだ。現役の学生に評判の悪い授業は、卒業生も一様に低い評価をしてくる。これは学部としてなんとかしなければならぬ重大な問題だが、評判の悪い授業担当者にこうしたことを伝えてもすぐには改善につながらない。

結局のところ、組織としてできることと言えば、同じ授業科目を複数の担当者で開講して学生が選択権を持てるカリキュラムを作る以外にないように思う。

#### 〔質疑応答〕

梶 田：これはとても評価の高い調査報告だ。仰るように、授業は可能ならば複数選択にすべきだ。

参加者：私の経験では、学生の授業評価にはポジティブなことが書いてある。「それはヨイショですよ」という意見を耳にしたことがある。

梶 田：記名だと「ヨイショ」の部分がある。フィードバックとして役立てばよい。自分の場合はきつということが書いてあることがある。

参加者：無記名と記名どちらがよいのか。

梶 田：記名にするか、無記名にするかは目的による。私はコメントを書いて戻すので、記名にしている。学生には記名を了承してもらっている。大学院2年間の変化をみるために利用している。最初の授業で人の目にも触れることを了承してもらっている。

参加者：ケンブリッジ大学の英文科の授業に出たことがある。ケンブリッジ大学では授業は自由参加。そこでは学生の授業評価をやっていた。私の出ていたクラスのうち、あるクラスは一杯で、もう一つのクラスは学生がいなくなってしまった。両方ともに良いクラスだった。学生の人気にはいろんな要素がある。学生の側に授業の準備状態を尋ねるといのはどうか。

梶 田：それは必要だ。私は、予習、復習の項目を含め、学生側の意欲を聞く準備をしている。人気の原因は多様だ。面白くない、役立たないというのは問題だが。

参加者：不人気でも疎かにできないということはないか。

梶 田：必修はごく少ない。国立大のカリキュラムとして用意しておかなければならないものはある。

参加者：私は前に会社にいた。新入社員に対して不満な点は、自分で課題が見つけれられない。未知なことに遭遇した時に対応できないことだ。ここをどうするかが教育の質の問題ではないか。会社では入社後約6ヶ月間コンピュータ処理などを鍛え直してから配属する。未知のことを解決する姿勢が必要であることを教える。今の学生にはクリエイティビティが低い。

梶 田：クリエイティビティを大学で訓練することも大事だ。二極分化するのではないだろうか。ルーチンをきちっとやる者と、新しいことを切り拓く者にと。日本は創造性に弱い。これには訓練する方法はある。その方法は米企業を中心に編み出されている。

参加者：先生のような授業評価（自由記述）をすると大変な時間が必要だ。そんなことをする時間があるのか。

梶 田：どこかで省力化しないといけない。院生にアルバイトでやらせている。このような研究には助手かパート・タイマーが必要だ。私は時間を節約するために非常勤はやっていない。集中講義はやるが。

参加者：クリエイティブな学生を育てたい。よい卒論を仕上げることができる教育、後になって、例えば50歳になって成功する教育等、どれを目標にすべきか。

梶 田：正解が一つに決まらないことがある。のびのびやらせてもちゃんと生きられる。ブランドで生きない方法はある。親がどう思うかだけだ。要は、自信を持って一生渡って行けるかだ。65歳までに有名になるとか、大きな家に住めるとかではない。現役のうちに関角の仕事をさせたい。それを大学のうちに身に付けさせたいと思う。多肢選択から正解を探すのは創造的ではない。かつて、ある大学で遠藤周作の作品から作者の意図を訪ねる試験問題を出したことがあった。作者に回答をしていただいたところ、作者が答えられなかったというケースがあった。今の受験問題では、クリエイティビティは育てられない。80才や90才になって、信大の教育が生きているような教育は素晴らしいと思う。

参加者：先生が、歴史と倫理が重要と思ったのはなぜか。

梶 田：論議には歴史がある。私は心理学をやってきたが、「騙し」の実験が流行ったことがある。答えが違くと被験者にセットされた電気の電圧が増すという実験だ。危険なことでも、やる側に正当な理由があれば何でもやるということの見本だ。倫理の欠如があった。

続いて外国人教師 David Ruzicka（共通教育センター）が、多摩大学学長 Gregory Clark の“Overcoming Japan’s English Allergy” (*Japan Quarterly*, 1998, April-June) を紹介。

ルジチカ：日本人の外国語学習方法は効果的ではない。これは大学入試から英語を排除することによって解決できる。受験英語が日本人の外国語学習をむなしものになっている。

梶 田：役立つ外国語を学習させるのはよくない。ただ、聞く・話すだけの英語でいいのか、読むための英語でいいのか、京大でも議論がある。

参加者：読み書きができる人は、必要な場に置かれれば話すことができるようになる。

梶 田：日本語の会話を10年間やり、日常会話には不自由はないが、日本語が書けない外国人がいる。一方で、日本に来て最初に平仮名とカタカナから始めた人の日本語は伸びている。

参加者：学生を外国に連れていったが、英語を学習するよい動機付けになった。大学で動機付けができるようにすべきだ。

梶 田：4年の間いつでも英語がとれるようにしておくことが大事だ。

参加者：医学部では高年生に医学英語をやっている。

#### ま と め（橋本）

教育の質を改善するには、現状の教育の質を知らなければならない。学生による授業評価は教育の質を量るために必要な手段である。学生による授業評価は、学生にとっては授業に対する自覚が深化し、教官にとっては個別の学生の反応から授業計画の補充・発展が可能になる。

2010年頃には、大学進学率は80%に達することが見込まれている。そのようなとき、教育の質を高める努力を怠った大学は生き残ることはできない。しかし国立大学は私立大学に比べて危機感が少ない。「研究は最先端のことをやり、教育は初歩からやる。」これがこれからの大学である。大学の教師は、研究・教育・社会の三つを連携させることが必要。

学生の気質は昔と比べて相当変化している。それに応じて授業方法も変えなければならない。学生の自主性を引き出すことは大事だが、同時に厳しく指導することも必要である。

参加者は、以上のことを中心にそれぞれの経験や体験あるいは各自の教育観に照らして、活発な議論を展開させた。結果として、参加者は国立大学の今日的な状況を知ると同時に、大学における教育の重要性を一層強く認識したと思われる。昨今の社会情勢から国立大学が置かれている現状を考えると、この種の議論は今後も続ける必要があろう。

参加者：本部＝小川秋實・橋本功，人文学部＝中野和朗・下田立行，教育学部＝谷本泰子・大竹芳夫・守一雄，理学部＝大塚勉・佐藤利幸，医学部＝福嶋義光・樋口京一，工学部＝土屋良明・北島園夫・野村彰夫，農学部＝建石繁明・只左弘治，繊維学部＝谷口彬雄，教育システム研究開発センター＝細野明義・山沢清人・杉野健太郎・ルジチカ・エドワード・デイビッド，医療技術短期大学部＝矢部正之。